

1. Pコンの先生方の関わり方と姿勢

- **関係づくりの重要性**
「待つこと」「言わないことを選択」など、相手のタイミングを尊重する姿勢が大切。
 - **関わり方の柔軟性**
相手（先生方）に合わせて関わり方を変えることが重要。これは児童生徒への支援にも通じる。
 - **チームの一員としての関わり**
「チームの一員になる」という意識が、支援の質を高める。
 - **自己開示の効果**
自己開示を通じて信頼関係を築くことが、支援のベースになる。
-

2. 探索段階の再確認と現場の実態

- **探索段階が終わっていない現場**
現場に入ってみると、探索段階が終わっていないことが判明するケースが多い。
 - **丁寧な探索の必要性**
探索段階を飛ばして進めると、失敗や抵抗感につながるため、丁寧な確認が必要。
-

3. 打ち合わせ時間の確保と仕組みづくり

- **中学校での打ち合わせ時間不足**
月1回でも30分～1時間の打ち合わせ時間を確保する工夫が必要。
 - **会議への組み込み提案**
既存の会議の前後に時間を設ける、または会議に組み込む形が理想。
 - **モデル校の条件提示**
大阪市では、モデル校になる際に「年1回1.5時間の打ち合わせ」を事前に提示している。
-

4. 中学校のPBSニーズと文化的背景

- **中学校の方がPBSニーズが高い**
生徒指導面での課題が多く、PBSの導入が効果的。
 - **組織的な動きが可能**
中学校は学年団で動く文化があり、導入後の展開が早い。
 - **小学校との違い**
小学校は学級単位での動きが多く、個別対応になりがち。
-

5. 子どもの主観評価の活用

- **ICTを活用した自己評価**
ロイロノートなどを使って、子ども自身が月1回マトリックス評価を行う。

- **キャンペーンの方向性決定に活用**
評価結果をもとに、次月のキャンペーン目標を決定。
 - **モチベーション向上に寄与**
子どもたちの「できた感」が取り組みの意欲につながる。
-

6. 褒めることへの抵抗感と言葉の選び方

- **「褒める」への抵抗感**
特に中学校では「褒める」という言葉に抵抗感があるため、「認める」「フィードバック」などの言葉を使用。
 - **強化という言葉も避ける**
「達成感につながるポジティブなフィードバック」を意識しながら、言葉選びに配慮。
 - **先生方の認識に合わせた対応**
先生が「褒める」と認識していても、それを「認める」「フィードバック」として伝える工夫が必要。
-

7. 他県の事例と応用可能性

- **LD学会での事例紹介**
宮崎県や新潟県の小学校で、主観評価を活用したPBSの取り組みが紹介された。
 - **スクリーニングへの応用**
主観評価を通じて、支援が必要な児童の抽出にも活用されている。
-

8. 徳島県中学校の課題と可能性

- **時間的制約の強さ**
関西圏と比べて、徳島県の中学校は時間的余裕が少ない印象。
 - **部活動などの制度的要因の可能性**
時間不足の背景に、制度的な違いがある可能性がある。
 - **中学校の方が展開しやすい可能性**
組織的に動く文化があるため、条件が整えば中学校の方が展開しやすい。
-

◆ 総括的な視点

- 現場の声をもとに改善を重ねることが重要
- 事前の条件提示と柔軟な関わり方が成功の鍵
- 主観評価やICTの活用が、負担を減らしつつ効果的な支援につながる